

あぜみち

◆農業は環境を守る？

北海道に移り住んで一五年になる。

サラリーマンを辞め、目的もない移住だった。農業を新しく始めるには知識もなく、体力にも自信がない。模索の末、ブルーベリーをやる気になった。気候が適しているらしいのと、農薬、化学肥料を使わずにすみそうだと、というのが理由だ。

五〇〇本のブルーベリーは、幸いに化学肥料も農薬も使わずに育って、去年から収穫が始まった。広葉樹のバークを毎年株元に積んでやり、目につく虫は手で取り除く。草刈りも年に五〜六回はやる。

ブルーベリーの勉強のために、北海道だけでなく本州の農村もよく走るが、自分が土に関わるようになってから、物の見方が少し変わったのに気付く。例えば、昔はよく手入れされているなどと思って眺めたような綺麗な野菜畑。今は、なぜ草が生えていないのだろうと思ってしまう。立派に育っているなどと思う反面、どうしたらこんなに立派に美しく育つのかと思ってしまう。牧場でも、昔は牛だけを牧歌的に見ていたような気がするが、今は糞尿を同時に考える。野積にされていると気持ちが悪む。

大型機械で撒布される農薬。多投される

化学肥料。牛糞の有機堆肥多投で地下水が汚染されていたという報告もショックだ。整然と並ぶピートンネル・マルチ。この膨大な量のピートンネルはどう処分されるのか。農協の回収率も芳しくないと思う。フワフワと風に舞うピートの切れ端は、いつかトラクターの耕運で畑に鋤きこまれる。マルチに開けた穴、トンネルの穴、千切れた切れ端、この切れ端は我が畑にも飛んでくる。拾いきれない。

農業は、土を汚し、地下水を汚し、自然を汚しているのではないか。汚染が蓄積されていけば、そのうち、「農業は公害産業」として批判を浴びるようになるのではないか。そうなつては困る。困るし恐ろしい。田舎の半農はいささか憂鬱である。

(北海道伊達市 皆川恒也 農業)

E-mail: t-mina@k2.dion.ne.jp

◆「くま」の新たな挑戦

一四年前、地域の再生をかけて「くま水車の里・かあさんの店」の村おこし事業が始まった。林業不振、高齢化、過疎化による危機から脱却しようと、総工費一億六千万円(内地元負担金四千二百万円は財産区より)が投じられた。

昭和六一年一〇月、補助金の受け皿母体として、熊地区(三〇六戸)全戸加入の活性化推進協議会が発足した。翌年六月、農産加工グループ「水車の里」(三一名)が誕生し、また昭和六三年五月には、そばを中心とした食事処「かあさんの店」(七名)がオープンし、

期待と不安の中で村おこしが始まったのである。かあさんたちの村おこしが珍しかったのか、健康・自然志向が時を得ていたのか、店へは当初から大勢のお客様が来てくださった。

あれから一五年、法人化の夢が叶えられ平成一二年六月、地域全戸を対象とする特定非営利活動法人夢未来くまが静岡県で五四番目に認証された。地域全体を構成員とし、女性達有志を中心とした起業組織を法人化する。村おこしの精神を忘れない為にNPO法人を選択したのである。法人化を機に若い仲間も加わり、一昨年には物産館も建設され全員はりきっている。水車部が担当する直売所での収益は、経費以外をその他の活動に充てるものとした。各集落へ出前のデイサービス(八カ所)や独居老人宅への給食サービスはしあわせ部が、そして、いきがい部はまちづくりや都市と山村の交流推進を受け持っている。ふるさと部は水と緑を守る人づくりの観点で「子どもの水辺」や「ふるさと」の山・川まもり隊人材育成を文科省や県より委託を受け活動が始まった。

過疎化と少子高齢化の進行は止まるところを知らず、一層その深刻さを増すばかりである。こんな時だからこそ、地域がひとつになって、心豊かで安心して暮らすことのできる地域社会をつくらうと、息の長い活動は始まったのである。

(静岡県天竜市 大平展子 NPO法人夢未来くま)